研究班番号【63】

増え続ける服の廃棄～高校から広がる衣服循環型社会～

社会班：出雲真希、辻彩織、山本日菜多、山本琴葉

要約

衣服の大量廃棄が問題となっているこの現代において、リユース活動は非常に重要であるが、若者はリユース活動に参加しにくいという現状がある。そこで私達は、私達に身近な高校という場でリユース活動を行い、若者の再利用への意識を高めてリユース活動を日常に浸透させることが、世界的な問題の解決の糸口になるのではないかと考えた。学校内で衣服の譲渡イベントを行い、アンケートを行った結果、イベントに来てくれたすべての人が、リユース活動を身近に感じることができたと回答したため、このイベントは若者の再利用への意識を高める効果があった。

さらにもっと多くの人にイベントに参加してもらい、再利用を広めるためには、事前にどのような衣服があるのかを告知し、このイベントを広範囲で継続的に行うことが必要であると結論づけた。

1. はじめに

今日、若者を中心にファストファッションが流行している。ファストファッションとは、最新の流行を取り入れながら低価格に抑えた衣料品を、短いサイクルで世界的に大量生産、大量販売を行うファッション業態のことである。しかし、ファストファッションにはたくさんの問題がある。例えば、衣服の製造過程での児童労働や、人体に有害な物質の使用、綿花などを栽培するための水の消費量の増加などが挙げられる。このような状況を受けて様々な団体がリユース活動を行っている。しかし、若者はリユース活動の情報に注目する機会が少ないため、リユース活動に参加しにくいという現状がある。そこでより身近かつ簡単に感じさせる事、若者自身の地域のリユース活動に興味を持たせる事、今後も自主的に参加し続けさせる事を目的に、若者である高校生を対象としたリユース活動を学校で行った。

2. 研究手法

使用する場面がなく不要な服を回収し、必要な人に譲渡するためのイベントを運営した。その後、対象をイベントの参加者と非参加者に分け、このイベントに関するアンケートを行った。

≪研究1≫

① 高津高校内の正門と裏門付近で4日間、登校時と昼休みに衣服を回収した[1]。

② 回収した衣服の検品と洗濯をした。また、洗濯不可な服は99%除菌可能な消臭スプレーを使用し、除菌をした。

③ 高津高校内で3日間、昼休みに衣服の譲渡イベントを行った。

≪研究2≫

① 衣服のイベントの参加者にアンケートをとった。

② 衣服のイベントの非参加者にアンケートをとった。

3. 結果

≪研究1≫

衣服は合計95着が集まり、62着が譲渡され、33着が残った。集まった衣服の内訳としては、トップスが45着、ボトムスが34着、ワンピースが16着であった。残った33着の衣服はH＆M ヘネス・アンド・マウリッツ・ジャパン社の店舗にある衣服回収ボックスに入れた。

≪研究2≫

① 「これまでにこのような活動に参加したことはありますか。」という質問には、約70％の人が「参加したことがない」と回答した。「この活動を通してリユース活動を身近に感じることができましたか。」という質問には、70%の人が「とても感じた」、残りの30%の人が「少し感じた」と回答した。「またこのような活動に参加したいですか。」という質問には、70%の人が「積極的に参加したい」、30%の人

[1] 今回はトップス、アウター、ボトムスのみを回収し、下着や帽子、ベルト、靴下、鞄などの小物は回収しなかった。

が「機会があれば参加したい」と回答した。

② 参加しなかった理由を質問したところ、「期間が短く時間がなかった」、「イベントの存在を知らなかった」、「事前にどんな服があるかなどを知りたかった」という回答が複数見られた。

4. 考察

イベントに参加してくれた約7割の人が、今までリユース活動に参加したことがないのにも関わらず今回のリユースイベントに参加してくれたのは、私たちにとって身近な学校という場において、積極的な呼びかけを行ったからであると考えられる。

さらに、イベントに参加した全員が、この活動によってリユース活動をより身近に感じられ、再び参加したいと思っていることから、若者の衣服の再利用に対する意識を高めることができたと考えられ、また、このイベントを1回で終わらせるのではなく、継続していくことが問題解決の糸口になると想定される。

一方で、リユース活動を若者の日常に浸透させるためには、さらに多くの人にイベントに参加してもらう必要がある。そのためには、事前にどのような衣服があるのかを告知する、イベントをもっと長期的に行うなどの対策がであることが、非参加者のアンケートから推測できる。

5. 結論

現在、世界中で服の大量廃棄が問題となっており、リデュースやリユース、リサイクルなどの方法で廃棄物の削減に努めることが求められている。そこで、高校生にリサイクルを身近に感じてもらうため、学校内で衣服を回収し必要な人に譲渡するイベントを行った。

イベントの結果、リユース活動に参加したことのなかった人が参加者の多くを占めた。そしてイベントに参加した全員から「リユースを身近に感じられた」「また参加したい」という意見が得られた。したがって、私達にとって身近な高校でリユース活動を行ったことで、参加者の再利用への意識が高まったと言える。さらにこのイベントを継続していくことは問題解決の糸口になる可能性があると結論づけた。

しかし、「期間が短く時間がなかった」「イベントの存在を知らなかった」「事前にどんな服があるかを知りたかった」などの理由でイベントに参加できなかった人もいた。それゆえ、事前にどのような衣服があるのかを告知したうえで、継続的かつ広域的にイベントを行うことを今後の展望とする。

加えて、33着の衣服が譲渡されずに残った。このようにして先進国で生まれた行き場のない衣料品が、アフリカなどの発展途上国に寄付されたとしても、現地のニーズがなければ最終的に大量廃棄されたり、発展途上国の伝統的な生産技法の衰退や新たなファッションブランドの成長を阻害したりするという問題もある。したがって、ファストファッションのビジネスモデルを根本的に変える方法の考案を、今後の課題とする。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

環境省(2021年)『環境省_サステナブルファッション』
https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/ 閲覧日2022年1月12日
消臭剤・芳香剤のファブリーズ公式サイト (2022年)『マイレピ』
https://www.myrepi.com/brands/febreze/ 閲覧日2022年1月12日
2021 原貫太 あなたとSDGsをつなぐ「世界を正しく見る」習慣